

プロテイノスからバルザフの入口へ

堀江 聡

五、六年前になるかと思いますが、私は一度、この東洋哲学研究所でお話しさせていただきました。その折は、紀元後三世紀のプロテイノスが遺した、神（一者）との神秘的合一体験表白箇所が、後代、さまざまな哲学者において、いかなる変奏を奏でて本歌取りされるかをたどり、とりわけイスラーム世界では、偽『アリストテレスの神学』、スフラワルディー、イブン・スィーナーの空中人間を紹介いたしました。

ただいま紹介していただきましたが、この五月、編著『新プラトン主義を学ぶ人のために』が世界思想社から刊行されたばかりですので、ご回覧いただければ

幸いに存じます。壮麗な列柱街道に圧倒される、表紙の口絵を飾る都市の写真は、目下戦争中で入国が不可能になってしまいましたが、シリアで私が二〇〇九年に撮ったアパメイアのものです。古代末期にアパメイアは、紀元後二世紀のヌーメニオスから、三世紀のアメリオスを経て、四世紀のイアンブリコスへといった一連のプラトン派哲学者の活動拠点として栄えました。新プラトン主義者にとって聖書 (Logos) の役割を果たした『カルデア神託』が神殿の御本尊だったという説もあります。

1 時空的「中間地帯」としてのバルザフ界

本日の話の主題としまして、首尾よくまとめるには、かなりの力業が必要とされそうですが、心積もりとしましては、バルザフ論に触れたいと思います。イスラームの「バルザフ」とは、西洋の伝統にいう「煉獄」に相当するものです。今回の講演の打診を受け、着想の展開に努めてきましたが、やっと切り口を見つけたかという状況です。今日は、その切り口まで、みなさんをご案内できればと念じております。

『神曲』の中の「煉獄界」

さて、煉獄といえ、みなさんもダンテの『神曲』を想起するでしょう。私は三年前にイタリアはピサ大学に客員教授として一年間滞在しましたが、ピサは斜塔を含む世界遺産の「奇蹟広場」が観光の目玉で、それ自体は半日もあれば観光が済んでしまします。それに引き換え、ピサから電車で一時間のフィレンツェには、ボッティチェッリの「春」や「ヴィーナスの誕生」で有名なウッフィツィ美術館、ブルネレスキ設計のサ

ンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂を初めとして、山のように観るものがありました。その見どころの一つにダンテ・アリギエーリの生家（とみなされているところ）がありまして、そこを訪れ、ダンテの『神曲』に思いを馳せたのです。結局、ダンテはフィレンツェで政争に巻き込まれて、永久追放処分にあい、フィレンツェに二度と再び戻ることは叶いませんでした。ビザンツ時代のモザイクの美しい聖堂で名高い東イタリアのラヴェンナが終焉の地で、そのダンテの墓も冬に訪れる機会があり、心に大いなる印象が刻みつけられました。

また、『神曲』のなかで、地獄から煉獄の最上層にダンテを導き、天国への案内をベアトリーチェにバトンタッチするまで道案内するよう設定されたのが、ローマ最大の詩人ウエルギリウスに他なりません。そのウエルギリウスの大きな銅像が、故郷であるロンバルディア州マントヴァという都市の公園にありまして、それを観たことも心のわだかまりを深めたような気がします。こうして、フィレンツェ、ラヴェンナ、マントヴ

アの三つのいわば「地方霊」(genius loci)に突き動かされ、ダンテの『神曲』に関連した思索へと私はいざなわれたのだと信じています。

具体的にダンテの世界に接近するに際しては、東京大学美学科の大御所でしたが、今道友信先生の晩年の著作から靈感を受けました。西洋古代・中世哲学のご専門のみならず、古今東西の文学・思想に通じた今道先生には以前にも、私の人生の重要な節目で進路を示唆していただいて、ずっと感謝しておりました。二十代でドイツ留学する折、ヴェルナー・バイアーヴァルテス教授につきなさいという助言をいただいたのです。日本でもつばらアリストテレス哲学の研究に取り組んでいた私が、結局、今道先生の言葉に導かれるようになり、西ベルリンはアリストテレス・アルヒーフからミュンヘン大学に研究拠点を移し、新プラトン主義研究の第一人者バイアーヴァルテス教授の門を叩くことで、今日の私の神秘哲学研究の礎は築かれることになったのです。

その今道先生は長年来、『神曲』の研究を、

浩瀚な注釈書の数々を参照しつつ、こつそりなさっていたらしい。ところが、隠れてなさっていたにもか



『神曲』煉獄篇から。ここでは、人間の「七つの罪」をひとつひとつとつ浄めながら、煉獄山を登っていく。絵は、山の第一の還道で「高慢の罪」を浄めるために、重い石を背負い、腰をかがめ、こうべを垂れて道を行く裸の人々。ダンテは自らもこうべを下げて歩く。その右は案内者ウエルギリウス。山腹には謙譲の範を示す物語が刻まれている

(第11歌。ギュスターヴ・ドレ画)

わらず、誰かにかぎつけられ、一連の講演が設定される運びになった。それが、みずす書房刊『ダンテ『神曲』講義』という著作に結実したわけです。これを繙きますと、「煉獄」という発想はさほど古いものではなくて、十二世紀だとおっしゃる。当時のラテン語では「ブルガトリーウム」(purgatorium)、それがイタリア語の「ブルガトリーオ」(purgatorio)になったという話です。ただ、その元は何かというと、まだはつきりわかっていない。一説によると、イスラーム世界からの影響が認められるという。それこそ、これから話するイスラームの「バルザフ」という観念に他ならないわけです。

それで、西洋中世の「煉獄」の起源は、イスラームだけに求められるべきかという、それは確言できません。つまり、古代末期ギリシアのポルフィリオス(AD 234-304)の著作(アンドリュース・スミス編『ポルフィリオス断片集』中の「ステュクスについて」)に探ってみると、天国のハデースと地獄のタンタロスの他に、「エリュシオンの野」という第三の場所が出てきます。それは、神々に愛された義(ただ)しい人間が死後の生を送る、雪も嵐

もなく、つねに西風が吹く住みやすいところで、別名「幸福者の島」という。面白いことに、パリの目抜き通り「シャンゼリゼ」(Champs Elysées)とは、「エリュシオンの野」の仏訳であります。ただ、これが中世の煉獄やこれから話するイスラームのバルザフと違うのは、罪を悔い改める場所とか、この世より劣った窮屈な世界とかでは決してなく、シャンゼリゼ通りの華やかさはもちろんものの、人々が穏やかな生を送ることのできる肯定的な第三世界であることです。

『クルアーン』の中の「バルザフ」

さて、肝心のイスラームに視線を移しますが、バルザフというのはあまり聞き馴れない言葉です。これは、ペルシア語の *pardah* のアラビア語形で、「二つのものの(隠れた)境界」を指します。辞書で「バルザフ」(*barzakh*)を引いてみますと、古典ギリシア語なら、世界中で参照されるリデル&スコットの希英辞典に相当する、ハンス&ヴェアーのアラビア語・英語辞典では「区分け、障害、邪魔物」、そして「イスマス」(*isthmus*)、つまり「二つの陸地を結ぶ細くて狭い陸地」を指すと

あります。より詳細なレインの辞書では、「何であれ二つのものに割って入り、両者を分離するもの」という敷衍した説明がみられます。「死者が死んだ時点から復活の日までに滞在する、今生と来る生の間のインターバル」とは、空間的中間地帯とも、時間的合間とも捉えることが可能でしょう。キリスト教と同様、イスラームでも生前の行い次第で、人々を地獄行きと天国行きに振り分ける、神による最後の審判なるものがあるわけですが、死後すぐに決済されるわけではなく、いつ起こるか分からない。そこで原理上、それまでは待機していなければならないと考えられます。サスペンス状態の中間的時間、待機の待合室がバルザフというわけです。

「バルザフ」は、イスラームの聖典『クルアーン』には三箇所が登場します。比較的具体的なものとしては、この世で淡水と海水が混じることを止める障壁を意味しています。第二に、それより抽象度の高い意味で、あの世から死者がこの世に戻るのを妨げるものを指す用例が確認できます。こちらのバルザフは現世と来世

の間にあり、個人の死後、最後の審判のために復活するまで魂が留まる場所と解釈されていきます。この場所は、決してギリシアのエリュシオンの野のように安楽な場所ではなく、終末の裁きを先取りすることく、墓の中で鬱屈するような様で描かれるほうが多いようです。ただ、解釈はさまざまで、後で見えていきますように、哲学者は己の形而上学的体系の或る階層に割り当てたり、肉体と同一視したり、大胆に拡張展開していくと言えるでしょう。

一般的に言えば、『クルアーン』は死と復活の間の時間・空間にさほど関心を示していないように思われます。死をすべての終わりとみなす前イスラーム期の詩人ほどではないとしても、その延長線上に位置づけてもよいのかもしれませんが。その路線を変更して、初期イスラームがバルザフ概念を形成していった背後には、ユダヤ教の影響が想定されることもあります。「詩篇」にはこうあります。

四九章一四節「彼ら（愚か者ども）は羊のように

よみに定められ、死が彼らの羊飼いとなる。朝は、直ぐな者が彼らを支配する。彼らのかたちはなくなり、よみがその住む所となる。」(新改訳)

一八章五節「よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。」(新改訳)

死後、愚か者を待ち受ける、この「よみ」は、明らかに安楽な天国とは別の場所でしょう。イスラームでは、罰としてのバルザフは空間的に狭い場所というイメージになるようです。

さて、具体的に『クルアーン』の中でどういうふうに出てくるのか見ることにしましょう。岩波文庫の井筒俊彦訳から引用します。初版の少々過激な訳が修正された井筒訳流布版からです。

二三章九九〜百節(カイロ版)「だが、さすがの彼ら(無信仰者)もいよいよ死に臨む段になると、「主よ、私をも一度還らせて下さりませ。今までは放って参りましたが、今度はきつと行いを改めます」などと言う。なんの、どうせ口先だけ

の出来かせであろう。また喚び起されるその日まで、うしろには障壁が立ちふさがっておる(二度と現世には還れない)。」

この「障壁」と書いてあるものは、現世と死後の世界の間に立ちはだかる一方通行のバリアーのようなもので、いったん通過したら、悪人がどんなに泣き叫び後悔しても、決して後戻りして、生き直すことを許さないものです。日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』(二〇〇九年版)の訳注(423頁)には、「戻れない障壁とは、人の死後、審判に至るまでの状態をいう」とあります。この解釈によるとバルザフは薄い壁ではなく、厚みが出るように、どんどん引き延ばされ、空間的のみならず時間的にかんりの幅をもつものと解釈されていた伝統を反映しているように思えます。

二つ目は二五章五三節です。

「二つの海を別々に放って、こちらは甘く、飲んでうまく、あちらは塩からくて、ぴりぴりさせ、両方の間に牆壁しやうへきを置いて、(混ざり合うこ

と)絶対禁止にし給うたのもあのお方。」

淡水と海水を隔てる境界という発想はユニークだと思えます。フランスにおけるプラトン研究の第一人者リュック・ブリッソンご夫妻を数年前お連れした天橋立を想起します。

再度、日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』の訳注(442頁)を参照しますと、「塩水と淡水とが交流するが、両方の間には越え難い分界があつて分離されている。この両者は常に混ざっているようでも明確に分類されていて、二つの水は神与の知識と人間の知識としても当てはまらう」とあります。二つの水を二種の知識の暗示ととる、これは一解釈に過ぎず、本当に正しいのかわかりませんが、塩水と淡水は比喩として、さまざまな解釈を誘う表現であることは確かでしょう。ただ、「塩水と淡水とが交流する」という註はいかがなものでしょうか。それは、両者の離在を強調する、この箇所
の文言からではなく、むしろ次に引用する五五章からしか読み取れないように思われます。

もう一つ、三箇所目が五五章。ここも二箇所目と似

て、二つの海の境が言及されていると考えられます。

五五章一九―二三節「二つの海を解き放つて、あい逢わせ、しかも間には障壁へだてを設けて互いに分を守らしめ給う。これほどの主のお恵み。さ、そのどれを嘘と言うのか。お前も、お前も。どちら(の海)からも真珠は取れる、珊瑚は取れる。」

井筒訳には「二つの海」の直後に「(塩水と淡水)」という訳注が付けられ、先の二五章を参照させていますし、日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』の訳注(667頁)でも、「二つの海とは、淡水と塩水をいい、河口などで一緒になる」とあります。しかし、「どちら(の海)からも真珠は取れる、珊瑚は取れる」という井筒訳には疑問が生じます。真珠や珊瑚が塩水から採れるのは分かりますが、淡水からも採れるのでしょうか。そうでないとしたら、「両者からは真珠と珊瑚が出される」と訳し、「両者の総体からで、その一方に当てはまる。つまり、塩水である」と註をつけた『タフシール・アル・ジャラーライン』第三卷(中田香織訳、二〇〇六年)

416頁のほうが正確かもしれません。それとも、「真珠」や「珊瑚」は字義通りにとるべきではなく、比喩的に神の賜物と理解して切り抜かれるのでしょうか。霊的読み方をしないかぎり、その読みは難しいと感じられます。

二五章では、塩辛くてぴりぴりする海水は飲料水にならないので、甘くてうまい淡水に混ざらないように、遠ざけられるのに対し、五五章では真珠や珊瑚が採れる海水のほうが、有価値の扱いをされています。二つの章を併せて読むことによって初めて、塩水、淡水双方の価値が出てくる気がするのです。先の箇所の場合、一方の水はポジティヴ、他方はネガティヴであり、両者の分離が強調されていたのに対し、今回のバルザフは両者を「あい逢わせ」ることから、結合機能の側面が新たに言及されていますから、両者ともポジティヴに扱われるという差異が表れています。二つの海が存在論的な二つの世界の象徴だとすると、一方を他方に従属させるのではなく、両者が同等の自己主張をもって存在する視座が、二つの章を読み繋ぐ解釈の手法を

通じて初めて導出されてくることになります。

結局、『クルアーン』の三箇所をみますと、「バルザフ」には海水と淡水の境界という字義通りの意味にせよ、神与の知識と人間の知識という比喩的解釈にせよ、この世とあの世の境界にせよ、確乎としたテクニカル・タームとして統合された単一の哲学概念を形成しているように、にわかには思われえないということです。したがって逆に、後世において読者の構想力を刺激し、多様な展開を鼓舞する土台になったと言えるでしょう。

さて、人間存在を無窮の旅人として眺めてみますと、水平的時間の観点からは、この世への誕生前↓誕生後↓死後↓復活↓天国ないし地獄の流れで人間を押えることができます。

問題は、各人は別々のときに死ぬわけですから、死ぬと同時に「最後の審判」にまみえるのではなく、いつの時点かで死者に対して一斉に「最後の審判」が及ぶはずだという点にあります。つまり、早く死んだ者はどこかで待機しなければならない。これは、それなりの場所を理論上担保することにつながりますし、ど

ここに滞在するだけでなく、魂のみで存在するのか、肉体のようなものを伴った状態なのかも気にかかります。それから当然、最後の審判と最初の死の間に何らかタイム・スパンがあることに思い至ります。その時空確保の要請に応えるのが、バルザフ概念に他ならないわけです。

バルザフでは、稲光のように輝く緑の目、雷のような声、地面を引き裂く長い牙を持つ、ムンカルとナキールという黒い天使が現れ、最後の審判に先立つ、イスラームの信仰に関する予審が行われるとされたり、千の翼を持ち、天から地まで、最果ての東から最果ての西にまで伸びる手に地球を持つ、見るに恐ろしい巨大なイズラーイールという天使が、巨大な翼で鉄のように不信心者をはじくとか、ルーマンという天使が「生前の行為を書け」と命令し、「ペンもインクもない」と答えようものなら、「指と唾液と経帷子で代用せよ」と命じられ、生前の行為の記録を復活まで首にぶら下げさせられるという伝承もあり、さまざまな天使を登場させるイマジネーションが膨らんでいったことが伺え

ます。

2 バルザフ界の形而上学的理解

ところが、このような通常の解釈ときっぱり袂を分かって、人間を垂直的に理解する道もあるのです。私に興味があるのは、このような形而上学者によるバルザフ解釈路線です。イブン・アラビー（1165-1240）は途方もない量の著作を書いた人で、井筒が愛読した、コンパクトで後代の注釈の多い『叡智の台座』だけでなく、『メッカ啓示』という大著を遺しています。原典の新版は十数巻出ていますが、まだ『メッカ啓示』全体の半分にも達していません。外国語による全訳は存在しませんし、原典を読破している人などそういない。そういう状況で、全貌を捉えずに、どこまでイブン・アラビー思想の片鱗に触れるか、はなはだ心許ないのですが、ギリシア哲学からは汲み出せないイスラーム神秘主義特有の思索を学べるのではないかという予想のもとに、イブン・アラビーのバルザフ観の入り口までたどり着きたいと願っています。

私はもともとギリシア哲学の研究から出発しましたので、加えてイスラーム哲学をやるのだったら、ギリシアにないもの、ギリシアの継承（プラトン主義、アリストテレス主義）から一歩踏み出して、独自性を加味したものを学べるのでなければ、わざわざアラビア語、ペルシア語原典に取り組む意義がないと考えました。その際、基準としたギリシア哲学は、古代最高の形而上学の評価が堅いプロティノスの新プラトン主義体系でした。ですから、まずその体系を総覧して、そこにあるものをバルザフに探るという手順で進めます。

新プラトン主義における存在階層

プロティノスの世界把握をかいつまんでお話しすると、存在階層の頂点に「一者」と呼ばれる神があります。通常、「一者」といえば「新プラトン主義」、「新プラトン主義」といえば「一者」を思い浮かべるというように、これがトレードマークになっています。にわかには考え難いのですが、存在すら超えた領域だとされます。本来、語りえないものであつて、一者というのも仮初めの名に過ぎません。存在でもない、知性でもない、

認識しない、運動も静止もしない、生命もない、大きな形もないと徹頭徹尾、否定の道で表現されています。しかし、これこそ、われわれの魂がそこへと戻ることを目指す最終目標になります。魂の一者とのいわゆる神秘的合一（*unio mystica*）がそれです。

次は知性の階層が来ます。「知性」というと「インテリジェンス」、我々が知能指数で問題とするような、言語を操り、推論する知性を想像しがちですが、そうではなく、直観を事とする知性を指します。だから、「直知者」と言ったほうが誤解を招かないかもしれません。

この領域に関しては前回もお話ししましたが、中村元先生は、華嚴経にいう「インドラの網」の世界に類似しているから、プロティノスはその影響を受けているに相違ないと指摘しています。華嚴経の形成期が二、三世紀ということで、プロティノスの生きた時代はちょうど三世紀です。インド哲学を見聞しようとして、プロティノスはローマ皇帝ゴルディアヌス三世の軍隊にわざわざ身を投じたという逸話が、弟子ポルフュリオスの「プロティノス伝」で言及されていることは、イン

ド思想のプロティノスへの影響を肯定する補強材料となりえます。さらに、プロティノスが二十代で、アレクサンドリアのアンモニオス・サッカスのもと、哲学を学び始めたとき、当時の国際都市アレクサンドリアには仏教普及センターがあっただろうという説もあります。そして、プロティノスの臨終の言葉は、ヴェエダーンタ哲学さながらの、小我を大我に一致させよという趣旨のものでした。プロティノスの知性界では、一つのものを観ることが他の一切のものを同時に観ることにつながり、他のものを観ることが自己を観ることもなります。一即一切、一切即一、重々無尽の世界です。円の中心に光源を置くと、円周に並んだ鏡に光が無限に相互反射し、留まることがないというイメージ。溢れんばかりの光の世界として知性界は描かれます。

そして、三番目の存在階層は魂ですが、これは少々複雑で、説明を要します。まず根源的な魂、すなわち根源魂なるものが、ヒュポスタシスを構成する魂として根底にあって、これが二つに枝分かれます。その一つ目は世界ないしは宇宙の魂で、この宇宙全体を賦

活する生命エネルギーだと考えていただければよいと思います。略して宇宙魂、宇宙霊、世界魂、世界霊（アニマ・ムンディ）と呼ばれます。二つ目は人間、動物、植物といった個々の存在者が有する魂です。個別魂と私は呼んでいます。なかには天体の魂、大地の魂なども含まれます。イアンブリコス以降の後期新プラトン主義になりますと、さらに大天使、天使、ダイモン（神霊）、英雄の魂も加わります。英雄とはヘラクレスのような半神で、日本では菅原道真のような英霊を思い浮かべてもよいかもしれません。

以上、一者、直知者、魂の上位三つが、基本的な存在階層を形成し、三つの原理的「ヒュポスタシス」とまとめられます。「ヒュポスタシス」も新プラトン主義のトレードマークのようなもので、「存立」と訳しておきます。基本的には、存在階層の意味でお取りになってかまいません。この時代、「ウーシアー」（真に存在するもの、実体）の代わりに用いられる流行語になっていましたが、プロティノスの弟子のボルフュリオスが新プラトン主義のテクニカル・タームとして採用し、イ

アンブリコス、プロクロスを経て、固定化されていったようです。

三つのヒュポスタシスが広義の知性界だとすれば、それをもとに、今度は感性界の生成が説明されます。世界魂の下部分が「自然」と言われますが、これはわれわれが日常、周囲に目にする出来上がった所産的自然ではなくて、その自然を産み出した元の能産的自然、いわゆる大文字の *Nature*、大自然の見えざる力です。これが、質料を産み出すのです。この最下の質料はまったくの無規定で非存在ですから、これを以って、もはや存在階層を産み出すことができない限界に行き着いたわけです。

滞留・発出・還帰を繰り返す「生命の連鎖」

さて、これら諸階層は相互に独立しているのではなく、産み出し・産み出されるという関係にあります。産出の契機をテクニカル・タームで「発出」といいますが、一者は知性を発出し、知性は魂を発出し、魂の下位的部分である自然が質料を発出します。しかし、下位のものは発出されつつ放しではなく、自分の生みの

親を振り返る。この契機を「還帰」(エピストロフエー)と呼びます。発出したものは、直近の上位階層を振り返り眺めることを通じて、初めて形相的に規定されます。したがって、下位の階層が生成するためには二段階のプロセスが必要とされているのです。一挙に生成するのではなくて、第一段階で無規定の質料として発出し、第二段階で、もとの生みの親を振り返ると、親が形相を付与する。この二段階を経て初めて、当該の存在階層として質料形相結合体が自立するのです。これがいわゆる二相性の原理です。ちなみに、全存在の発出の最後に質料が初めて登場するのではなく、どの階層の発出にも、最初の契機としては毎回、質料が出現します。ただ、還帰を通じて、直ちに形相的に規定されてしまいますから、質料そのものが剥き出しで残ることはありません。最終質料のみ恵と同一視されることがあり、まったくの闇で「無力」と形容されます。

一者から知性が派生する場合も、知性から魂が派生する場合も、このプロセス、つまり二相性の原理が繰り返される。ところが、最後の部分で崩れます。すな

わち、最終質料は非存在の極みで、まったくの無力ですから、自ら生みの親たる自然を振り返る力さえ、もはや持ち合わせていないのです。そこで、親たる自然のほうがいま一度、第二のイニシアティブをとって介入し、質料に規定を与えてやることになります。すると、その結果、ようやく物体が誕生します。この物体に、上述の個別魂が合体する。受肉と言いますが、受肉してこの人間というものができる。宇宙の中で、人間が登場するまでには、ここまで紆余曲折した説明が必要とされているのです。

もう一つ補足しますが、体系構成のうえで、発出、還帰の前提として滞留という契機も要請されます。滞留というのは、コップから水がどんどん吹きこぼれても、コップは空になることなく、汲めども、汲めども尽きぬ泉のごとく、つねに満面の水をたたえているような状態です。自らのうちから取って、他に与えても一向に減ることがない無限の溢れ出し。与而不減の原理です。一者から知性へも、知性から魂へも無限の溢れ出し、自然から質料も無限の溢れ出し。一神教に移

植されれば、神の無限の慈愛が、この世を不断かつ永遠に創造して止むことがない様に譬えられます。

それぞれの階層ごとに、滞留・発出・還帰の三つ組のモーメントが反復されるのですが、頂点の一者から、最下層の質料に至るまで長大な一本の線で繋がっていて、万物が一者から発出し、一者へと瞬間毎に還帰していくと捉えて一向に差し支えありません。事実、この生命の連鎖をプロティノスは一本の世界樹に譬えています。根は天上にありますから、転倒した樹のイメージです。しかも、これは無時間の発出ですので、産み出されて後、振り返るというような時間的な前後関係を含んだ説明は、たんに便宜上の話にすぎず、論理的な前後関係の明示に他ならないと、繰り返し注意が喚起されます。

さて、「振り返り」「還帰」と訳したギリシア語の「エピストロフエー」は、ラテン語では「コンヴェルシオ」(conversio)と訳されます。英語の「コンヴァージョン」の元の言葉ですから、「振り返り」から派生して、己の心を振り返ることから「回心」「悔悟」という意味も出て

来ます。感性界にどっぷり漬かっている人間の魂がコンヴェルシオしていくこと、すなわち回心というのは、プロティノスの体系では三段階あると私は解釈します。

まず、人間というのはこの世的なものに忙殺される物体的人間の状態から、真の魂の内的世界に戻ることがあるわけです。そこでは、魂同士のテレパシーが起こる可能性が示唆されます。「魂」を意味するギリシア語の「プシューケー」は女性名詞ですから、同じ根源魂から派生した個別魂と世界魂はsoul-sisters、つまり「姉妹関係にある魂」だと言われます。また、個別魂同士も根は一つの姉妹であるゆえに、根元まで立ち返れば、同一の心ですから、相互に意思伝達が無媒介で起きるのは不可能ではないという論理です。ユングの「集合的無意識」の発想もここに遡るのではないかと指摘した論文もあります。われわれ各人は通常、氷山の海面に突き出た部分しか見ていないので、別々の存在のようにお互いを思いなしていますが、海面下に潜れば、相互に連なっているという比喩で表されます。各自の表層意識は多であっても、集団的無意識は全人類に共

通の一つ基盤であることになります。

ついでに、一個の人間の個別魂が世界魂と姉妹であるという発想も大事だと思われます。一本の葦に過ぎない人間は弱いだけでも、世界魂と親子ではなく、姉妹なのですから、優劣関係には入らず、個別魂の力は、じつは全世界のエネルギーに匹敵するのだということです。したがって、個別魂は世界を統べる運命の配下に服さず、知性神の摂理のもとにあるのだと主張されていきます。

回心というか還帰の深化した次の第二段階は、範型アイデアが群れなす知性界への上昇です。知性界に戻ると、一つのものの認識と同時に、すべてのものが認識される。アイデア認識は一個の認識であるにとどまらず、無限に反射し合い、全アイデアの認識になる。一本の光は折り重なり束ねられて、燦然と煌めく光の洪水と化す。重々無尽の世界に自らも参与するので、己を観ることによって、アイデア界全体の眺めを得、個々のアイデアの中に己を見出す。美の大海原で、ここにこそ、われわれの真の生命があると言われます。

最後の還帰・回心の第三段階は、一者との合一です。

一者は認識しないとされていますから、一者と合一した我も認識しないはず。知るものと知られるものという二者に分裂して初めて、認識というものが生ずるからです。知性領域で初めて、認識ということが出てきます。合一の消息は、高波に持ち上げられるような高揚感、肉体的情念の重石によって後ろ髪が引かれることがなくなる軽快感、長年求め続けてきた恋の相手の懷に休めたような満足感、知性界でのそれに優る光の体験があると、比喩的に語られるのみです。

人間の意識の首座を現代では、「エゴ」「我」と呼びますが、プロティノスでは「われわれ」というように、個人の自我を指す場合でも複数形を用います。なぜ複数形なのか、いまだ説得的に論じ切れた論文には、寡聞にして巡りあっていません。人間は存在論的にというか一者論的にいうか、特定の存在階層に固定されているわけではありません。ドッズの言葉を借りれば、意識とは「存在階層の上下を浮動するスポットライト」のようなものであって、意識が眼差しを向ける対象次

第で、意識の在り方が決定されてしまう。「決定される」といっても、一時的であることは無論で、当該の存在階層に仮の宿りをするに過ぎません。ですから、個別魂から根源魂に意識が移行することもあれば、直知者へとさらに前進することもあり、ひいては脱我して一者と合一し、一者へと推移することもありうる。逆に下に堕ちれば、けだものになるも、植物人間になるも、死んで物体と化することも可能である。このように上から下まで、さまざまなバリエーションで変容可能なのが、「われわれ」の在り方に他なりません。

「二者論」（ヘノロギア）の哲学

魂の向け換えによって、いわば実存的に体験する存在階層の下から上への廻行を先にみましたが、存在階層を客観的に眺めるとどうなるか。動的体験の記述と静的形而上学の記述がコインの裏表のように同じ論文中に、いやそれどころか同じ章のうちに交互に入れ替わって登場するのが、プロティノスの論攷の読みにくさでもあり、魅力でもあります。そこで、静的形而上学の記述を紹介しますが、一と多を組み合わせ、両者

の濃淡の付け方いかんで、上から下まで存在階層を切り分けていきます。一と多のグラデーションです。一者は一ですから、ひたすら一で、多なく一のみ。知性は「一多」という独特の定式で、一と多の間に「と」(and)も置かずに表現されます。つまり、一と多が緊密な状態で、一だと思いきや多になり、多と思いきや一になる、相互に転換し合う世界。これと対照的に、次の魂は「一と多」で「一多」の間に並立助詞の「と」を差し挟みます。ヒュポスタシスとしての魂は一なるものであるけれども、世界魂、多数の個別魂に分節されていきますので、一という側面と多という側面が併存します。物的性質は多なる在り方が主で、一なる在り方は従なので、「多」を先に出して「多と一」、物体は多、ないし無限多です。このように一と多という観点で構築する形而上学を「一者論」(ヘノロギア)の哲学と言います。「二者」はギリシア語で「ヘン」と言いますから、「ヘン」をめぐる「ロゴス」(議論)です。一般によく知られた、「存在論」(オントロギア)の哲学と対比された名称になります。存在論では、周知のごとく

階層を存在と非存在のグラデーションで分けていきます。頂点は、「出エジプト記」の神の自己啓示ともマッチングする「在りて在るもの」たる存在一色。この存在の充溢が次第に非存在に浸食されていって、果ては質料の「メー・オン」すなわち非有に行き着きます。普通「形而上学」というと、存在論と同義に扱われてしまいましたが、一者論という行き方もあるのだとご記憶願いたいと思います。そして、新プラトン主義の流れというのは、まさに形而上学に一者論の立場から接近する試みに他なりません。

一者論には一多の観点だけでなく、光のグラデーションによって存在階層を区別する特徴もあります。最高神は真に輝くばかりの光で、スフラワルデーの言葉では「光の中の光」です。そこから下降するにつれて闇が混在してきて、最後には光なき全くの闇、質料に行き着きます。ちなみに、ゴシック建築は新プラトン主義の芸術上の開花と言われますが、それは、十二世紀パリ郊外のサン・ドニ修道院長シユジュールが、新プラトン派プロクロスの影響を色濃く受けた擬ディ

オニュシオス文書に打たれ、神たる光でステンドグラスを通して聖堂を満たそうと考えてのことでした。

イスラームだと、存在論の系譜と一者論の系譜が融合して截然と区別しがたくなる印象を受けます。存在のリアリティーそのものである神による「クン」（存在せよ）という命令形の一語で世界が創造されたというのも、イブン・アラビーの最高存在は「アハド」（絶対一者）とも呼ばれています。じつは、新プラトン主義はキリスト教だけでなく、イスラームやユダヤ教といった一神教とうまく折り合いがつくようです。「一者」といって「者」を付けてしまうと、新プラトン主義に限定されてしまい、通常「一者」は耳にしない言葉なので、気づかずじまいに終わりがかねませんが、「者」をとって神は「一」であるという表現は、何のことはない、『旧約聖書』にも『クルアーン』にも出て来る由緒ある名前なのです。

『クルアーン』には九九の神の美称というのがありまして、神の名前が『クルアーン』から九九通りに採取できるということになっています。四〇章一六節

「・・・アッラー。唯一なる御神、向うところ敵なきお方」のうちの「唯一なる」の原語は「アル・ワーヒド」ですから、「ザ・ワン」です。「唯一なる」と訳さず、一なる神、「一者」と訳すことも可能です。ということは、ムスリムにとっても「一者」というのは聖典に典拠をもつ歴とした神の神聖な名前なわけで、「一者」をもとにイスラーム哲学を大々的に展開して全然かまわないことになるのです。

それから、ユダヤ教に目を向ければ、「申命記」の六の四に「聞けイスラエルよ、我らの神、主は唯一の主である」（新共同訳）とあります。日本語訳で「唯一の」と訳してある原語は、「エハド」ですから、「一者」と訳せます。また、「ゼカリヤ書」の一四章九節でも、「主は地上をすべて治める王となられる。その日には主は唯一の王となられ、その御名は唯一の御名となる」（新共同訳）のうち、「唯一の」は「エハド」の訳ですから、「一者」ととってかまわないのです。さらに、「ヨブ記」二三章一三節の「神がいったん定めたなら、だれも翻すことはできない」（新共同訳）の「いったん定めたなら」

という邦訳には、「一」すら訳出されていませんが、「一者ならば」と訳することもできる原文です。

中世ユダヤ哲学の研究は本邦においてはもとより世界的にも遅れていて、研究進展の必要性が声高に叫ばれている分野ですが、じつは、新プラトン主義の影響をかなり受けていることが分かっています。イサーク・イスラエリとか、イブン・ガビロールといった人たちが安んじて、聖書のみならず新プラトン主義を思索の糧とすることができたことの背景には、「一者」という神名が聖書から保障されているという事実があるに相違ありません。

イスラームの「バルザフ」

——一者と感性界を仲介する「知性界」

さて、これまでお話したギリシア版の形而上学がイスラーム世界に行ってどうなるのか。イスラーム圏では九世紀のアル・キンディーを嚆矢として哲学が始まりますが、アル・ファラービー、イブン・スィナー、イブン・ルシユドを経由し、真にイスラーム哲学が誕生したのは、スフラワルディーとイブン・アラ

ビーにおいてだと言われます。スフラワルディー（1154-1191）が十二世紀の人で、イブン・アラビー（1165-1240年没）は十三世紀にかかりますから、前者が少し後者に先行します。ダマスクスに聳えるカシオン山は、人類最初の殺人が行われたという言い伝えの山ですが、その麓にイブン・アラビーを祀った廟がありまして、緑の布に覆われ、ガラス・ケースに納められ、大変厳重に安置されていました。三七歳の時、処刑されたスフラワルディーの廟も北シリアのアレッポで探し出して訪れましたが、無防備に手で触れられる状態でしたので、イブン・アラビー廟との対比が印象的でした。約二倍長く生きたイブン・アラビーのほうが、バルザフ論も展開されていますので、イブン・アラビーのほうで、今日の提題のバルザフがどこでプロティノスにないオリジナルな思想の展開へ貢献するのか、瞥見してみましよう。

中間世界としてのバルザフは形而上学的な思弁に乗ると、一者と感性界の間にある知性界を指すことになります。知性界を挟んで、狭義の被造世界である感性

界と対置されるのが、プロティノスの一者に相当するものですが、それは絶対者、隠れたる神です。「アルⅡハック」（真なるもの）が爾余一切のものと没交渉の神を指すとすれば、「ハキールカ」は既に原初の状態から立ち出でて、被造世界との関係に入った神を指すと思われる。隠れたる神のほうは、「アッラー」とも言えない。井筒俊彦の言い方では「意識のゼロポイント」。一ではなくゼロなのだ、ということになる。ゼロとただの多の間にある一多の領域がバルザフだというふうに捉えられます。だから、『クルアーン』の字義的解釈からは程遠い、かなり抽象的なバルザフ解釈が展開されています。バルザフというのは、ゼロと多の両者を切り分け、混じり合わないようにすると同時に、結び合わせるところに真骨頂があります。

『クルアーン』の文言からどれだけ、分離と結合が基礎づけられるかというと、二五章五三節の「二つの海を別々に放つて、こちらは甘く、飲んでもうまく、こちらは塩からくて、ぴりぴりさせ、両方の間に牆壁を置いて、（混ざり合うこと）絶対禁止にし給うたのもあの

お方」からは、どう頑張っても、二つの海が混じらないように分離することだけが強調されているとしか、私には読めません。したがって、五五章一九節の「二つの海を解き放つて、あい逢わせ、しかも間には障壁^{へだて}を設けて互いに分を守らしめ給う」を併せ読み、「あい逢わせ」を典拠に加えて初めて、結合の側面が引き出されるのです。

バルザフなる知性界は、一者の不可知の世界が感性界に発出して来る際に、通過することが必然の世界です。一者は一気にこの世へと顕現するのではなく、バルザフ界で不変の原型（アアヤーン・サービタ）となつてまず現れます。「アアヤーン・サービタ」の「アアヤーン」というのが「原型」で、「サービタ」は「確乎とした」という意味です。原型とは、神がこの世のものを創つていくうえで設計図のようなもので、プラトンが着想した「イデア」の言い換えです。ただし、イデア、つまり人間とか諸々の動物とかの原型は知性界に存在するわけですが、プラトンでは知性と一体ではありませんでした。イデアは『ティマイオス』篇では、世界創造

主であるデーミウールゴスが彼方に眺める、この世の諸事物のモデルとして分離しているかの印象を与えます。ところがプロティノス以来、イデアは知性でもあると解されるようになって、客観的な認識対象であるイデアが、主体的な認識者でもあることになり、認識主体が認識客体でもあるというように、相互にめくるめく反転するダイナミックな世界が誕生したのです。

原型というのは、感性界の諸事物のように感覚では捉えることができず、想像力によって捉えられます。留意すべきことは、この想像力がたちまち消えてなくなるような、人間が恣意的に思い浮かべるものではなくて、創造主が世界を立案するさいの心の活動と等値されるものだという点です。したがって、事物を無から産み出していく創造的な想像力を念頭に置かなければなりません。受動的な想像力ではなく、ゼロからこの世の設計図を立ち上げていく能産的力です。それにより、のっぺりした掴みどころもなかった根源的存在に筋目が入ってきます。まだ被造世界の多にはなっていないものの、その一步手前で潜在的に多の切れ目が

入っている状態です。これこそ永遠の原型、イデアに他なりません。それに則って現実に生成するのがこの感性界ですから、根源的存在と感性界の間に介在し、両者を仲介する中間世界がバルザフというわけです。したがって、このバルザフ理解によると、最後の審判を待つ間滞する時間というスパンは、まったく問題とされません。死んでから初めてバルザフに赴くのではなく、神による創造のプロセスを逆にたどって、人間が生前からバルザフに遡る可能性が出て来ます。プロティノスの言葉遣いでは、知性界への還帰、回心です。プロティノスの言う「自我」すなわち「われわれ」は、上下に自在に移動するスポットライトですから、この世においてすでに「われわれ」は知性界に遊びます。このような芸当は並の人には不可能でも、プロティノスは生涯に少なくとも四回、神秘体験をしたと報告されています。「魂の肉体への降下について」という有名な論文の冒頭には、プロティノスがしばしば肉体から逃れて、知性界の美の大海原を目撃したという告白がみられます。

バルザフ界Ⅱ知性界と一体になった完全人間

では、イブン・アラビーではどうかというと、そういう知性界に行くことができる人間を「完全人間」（インサン・カーミル）と呼びます。マイクロコスモスとしての完全人間は、マクロコスモスとしての知性界と一致して、全世界を体现するという発想です。ここで、ギリシアにない革新として注目すべきは、完全人間の具体例が挙げられるということです。ムハンマドが真っ先に言及されるのは予想ですが、ムハンマドに限定されず、神の似像に象つて造り上げられたアダム、アブラハム、ノア、モーセ、イエス、シリア派ではムハンマド以降のイマームも加えられていきます。このような思想の展開は、ギリシア古代末期の新プラトン主義ではお目にかかりません。還帰の潜在力を有する人間一般という論じ方ではなく、具体的な預言者というかたちで例示し、預言者、聖者、イマームを称揚する。これこれの人たちは、感性界に浸っている領域から知性界、つまり神が世界を創るさいに用いた原型的想像力の世界に同化、一体化できたといふのです。

完全人間の具体例を、時空を超えた存在へと抽象化するにしても、「ムハンマド的実在」とか「ムハンマド的光」といって、史実実在人物が表現に残るのも興味深いところです。ムハンマドは時間的にはアダムよりずっと後に現れたのですから、ムハンマド的実在といふのは論理的にアダムに先行する本体という扱いです。何度も一者や知性界と合一したプロティノスであつても、晩年に一度だけ合一できた弟子のポルフュリオスにしても、個々の固有名詞が独り歩きして「プロティノスの実在」とか「ポルフュリオスの実在」などと言うことは決してありません。

ところで、『クルアーン』に出て来る神の九九の名前を改めて眺めてみますと、「創造者」に当たる名前が何通りも出て来ますね。「創造者」（アル・ハリーク）、「造物主」（アル・バリウ）、「造形者」（アル・ムサツウィル）が目に入ります。哲学者はそれを区別して説明しようとしめす。たとえばガザリーは、創造者は計画立案のクリエーターであつて、造物主は実際にその計画に則つて創出する者、「アル・ムサツウィル」（形成者）の

語中に含まれる「スーラ」は「形相」という意味なので、造形者は創出された後、形成する者と理解します。そういうふうに分けて解釈しています。他の九九の神名も、このように腑分けしていきますが、すべて説得的に説明し切れているようにはみえません。

本日のテーマに関連して押えるべきは、『クルアーン』で神は「最初のもの」と呼ばれることもあれば、「最後のもの」という神名もあるという点です。両者を統合すると、神は「最初のものであり、かつ最後のものでもある」となりますから、ユダヤ教・キリスト教の「聖書」にいう「アルファにしてオメガである」と同じです。創造の出发点が一者であるとすれば、創造の最後は被造世界です。時間を差し挟まなければ、一者が被造世界でもあり、被造世界が一者でもあると宣言している」と解釈する余地が出て来ます。

この思索を補強する『クルアーン』中の神名は、「顕現者」(ザーヒル)、「内奥者」(バーティン)です。ザーヒルは「外なるもの」で、「バーティン」は「内なるもの」。併せて「外にして内なるもの」。一者は内に隠れている

一方、被造世界は外に現れています。両者を媒介するものとして知性界は、原型という筋目が一者に入った段階ですから、半分隠れつつ半分現れています。いわゆる対立者の一致 (coincidentia oppositorum) を體現しているのです。

スーフィズムを修行していくと、「ファナー」(消融)という段階にまず達し、この世の事物の多性が消え、神一色になるといいますか、すべてが神に呑み込まれてしまいう境地に達すると言います。しかし、これは修行過程の半ばに過ぎないのであり、再び世界が分節化される段階に達しなければならぬとされます。多が復活するのです。この境地を「バカー」(持続)といいます。スーフィー(イスラーム神秘修行者)にとって究極目標は、世界が一者だけになるに尽きず、多が保存されたまま、多のなかに一者を観ること、多と一を同時に観ることです。登り道と下り道、向上道と向下道両面が必要なのです。最終的に、事物は再びばらばらになって現れるわけですが、そのときの光景は、最初に分散的に見えたものではなくて、一なるものの顕現と

しての多なるものだということが、きちんと了解されている。つまり、同時に双方を観ている双眼の士なわけです。

イブン・アラビーですと、一イコール多である領域は、存在階層としてはバルザフたる知性界です。知性界と同一になった完全人間は、最初と最後、内と外の両方に開眼している人であり、「聖者の封印」といわれるイブン・アラビー自身が、まさにそのような完全人間であつたと推測されます。完全人間は、塩水と淡水を分けるのだけれど、分けて終わるのではない。分けて分けない。二面を無傷で保存する者となります。一者の領域にある者が最善なのではなく、一番下の領域にある者が偉いのではない。有無中道のリアリティーである第三のものが一番重要なものに昇格されるのです。知性界を「諸実在の實在」（ハキーカー・トゥル・ハカーク）というのは、複数の實在を単数の實在が束ねているからです。単数の知性が複数の知性すなわちアイデアを含んでいるとも解せます。単数の知性は、その単数の側面では一者と通底しており、複数の知性はその複

数の側面で感性界の諸事物と通底している。したがって、バルザフ界＝知性界と一体になった完全人間は、一を透かして、一者と単数の大知性を眺め、多を透かして、感性界と諸知性を眺めているということもできるように思われます。歴史的現実には生身のからだを以って生きた、そういう完全人間たちは聖者廟に祀られ、人々の崇拜対象になっていくというのも、ギリシアにはない現象として、私は注目しています。

『クルアーン』に言う、この世に戻さぬはずの鉄壁のバルザフを突き抜けて、生前からバルザフに自在に入りし、一者界・知性界・感性界の三界を同時に観じた完全人間は、ダンテが獲得した視座をも超えて、宇宙の顕現・非顕現を同時に見通す霊智（マアリア）を獲得したのかと想像するに留め、本日は幕を引くことにいたします。

（ほりえ さとし／国際基督教大学講師・
新プラトン主義協会元会長）

※2014年5月13日に行われました。